

# なごや 文化情報

2014  
9・10  
September / October

No. 358

NAGOYA  
Cultural  
Information

随想／かつおきんや（児童文学者） 視点／ついに発刊!「セツ寺共同スタジオ」40周年記念誌  
この人と／藤 真知子（童話作家・詩人） いとのサブカル／庫元 正博（金城学院大学国際情報学部 教授）



2014

9・10

September / October

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2  
 随想 童話「ごん狐」の父を追う…かつお きんや(児童文学者)… 3  
 視点 ついに発刊!「七ツ寺共同スタジオ」40周年記念誌… 4  
 この人と… 藤 真知子(童話作家・詩人) …………… 6  
 ピックアップ クラリネット奏者 つつみ あつき …………… 10  
 いとしのサブカル 庫元 正博(金城学院大学国際情報学部 教授) … 11  
 おしらせ…………… 12

表紙

作品  
 「チェルノブイリ」  
 (1989年~/セルペン/26×23×23cm)  
 やきものとは何か?がわたしのテーマです。  
 太陽も月も星もわたしもあなたも アレッ 忘れてた  
 地球もやきもの  
 広島、長崎、ビキニ、スリーマイル、チェルノブイリ、  
 福島……………

鯉江 良二 (こい え りょうじ)

- 1938年 やきものの町常滑に生
- 1945年 終戦
- 1950年 やきもの屋で夏・冬働く
- 1954年 成績 中の下 高校やきものを学ぶ
- 1957年 陶のブロック会社へ就職
- 1962年 陶芸研究所へ……………自立?

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

「2013年 名古屋市民文芸祭」  
 (第六回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部  
 川柳の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆ 東海市立加木屋中学校1年 立山 伊吹

キックオフ風も応えんしてくれる

◆市会議長賞◆ 椋山女学園大学附属小学校2年 溝口 陽菜

なつとうがねばねばダンスしているよ

◆市教育委員会賞◆ 一宮市立北方中学校1年 安達 桃伽

思い出が家族写真にあふれてる

◆市文化振興事業団賞◆ 東海市立加木屋南小学校4年 藤井 珠希

森の水ながれて町へたびに出る

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆ 名古屋市神の倉小学校6年 佐土原 千尋

七色の絵の具をぬるよ雨上がり

◆中日賞◆ 名古屋市立緑小学校6年 加藤 誉美

誕生日少しわがまま言ってみる

## 随想

## 童話「ごん狐」の父を追う



かつお きんや(児童文学者)

1927年金沢生まれ。金沢大学卒。1971年から21年間愛知県立大学文学部児童教育学科に勤める。同大学名誉教授。「天保の人びと」「五箇山ぐらし」「人間・新美南吉」「森銚三と児童文学」他著書多数。

去年新美南吉生誕100年にあやかって『時代の証人 新美南吉』(風媒社)を出したら、その読者から「ごん狐」にも裏話などないものかという声がいくつか寄せられた。

そう言われると私自身知りたい事がたしかにある。例えば、彼はどんな切っかけで、あるいは何に刺激されてあの童話を書こうとしたかという点だ。昭和の初めの頃にはキツネは農村部ならどこにでもいた。南吉の故郷岩滑には六蔵狐と呼ばれて皆に親しまれた老狐がいて、死後は墓まであった。だから南吉はキツネが出て来る童話をどっさり書いた。そのトップバッターであり、MVPが「ごん狐」だから執筆動機が気になるのもむりはない。

そこであれこれ探そうちに思いがけない先行作品があった。それは、児童雑誌「赤い鳥」の昭和7年1月号に載った「ごん狐」の約半年前に載った茅原順三の「人形つかい」という童話だった。その内容は、下総に住む人形芝居の一座が、見知らぬ侍から主人の希望だとして屋敷での出張上演を前金で頼まれて引受け、翌夜迎えの者の案内で訪れ

た先での上演は成功し、酒食の接待を受けて寝てしまい、翌朝目がさめてキツネに化かされたと分かるが被害は無しだったという時代物の童話だった。

キツネそのものは見せない巧みな化かし話に、南吉はひそかに闘志を燃やしたと思われる。実はこの作者は刈谷出身で昭和7年秋から同誌終刊まで「赤い鳥」記者を勤める森三郎だった。周知のように刈谷も恩田の初蓮のいくつもの話をはじめキツネの民話の宝庫とも云える旧城下町。南吉と森三郎とがゆっくり会ってキツネの話をしたらどんなに盛上ったかと思うのだが、三郎の入社直後に南吉が「赤い鳥」社を訪れたもののすれ違い同然だったそうで、何とも惜まれることだった。それはともあれ、この「人形つかい」が「ごん狐」執筆のよい誘い水になったことは間違いあるまい。

うれしいことに、近年絶滅が伝えられていた野生のキツネが、知多の阿久比で川に落ちていたところを助け出されたという朗報が去年あった。その子ギツネのためにもがんばって一冊にまとめねばと、老骨に鞭打つ猛暑である。

# ついに発刊！ 「七ツ寺共同スタジオ」40周年記念誌

時代を超えて名古屋演劇のメッカであり続ける「七ツ寺共同スタジオ」が40周年を迎えたのは2012年。足掛け2年に及び編集期間を終え、待望の記念誌「空間の祝杯Ⅱ～連動する表現活動の軌跡」が出版された。名物小屋主の二村利之氏が「代表を退く区切りとして」粘りに粘って編集した渾身の記念誌は、一芝居小屋の活動記録を超越し、時代考察や批評精神にあふれた名古屋の芸術文化史そのものである。発刊を目前に控えた二村さんに取材した。(まとめ：はせひろいち)

## 冒頭を彩る諏訪哲史氏の自由詩

今回の記念誌は、そのタイトルからも判るように、共同スタジオ25周年の際に出版された「空間の祝杯～七ツ寺共同スタジオとその同時代史」の後を受け継ぐ形で編まれているが、40年の流れに関しては改めて多くのメッセージや寄稿が掲載されている。そもそも1999年に発行された25周年誌が、A4版336ページの超豪華なヴォリュームで、執筆、寄稿者は80人を越し、七ツ寺に関わった劇作家、演出家、劇団はもちろん、舞踏、映画、美術などの他ジャンル、他の劇場、名古屋以外の演劇界の流れまで汲み取った、まさに同時代史に値する内容だった。その根底には時代そのものを検証する批評眼が貫かれ、演劇人にとっては「60-90年代小劇場文化」を語る上では欠かせないバイブル的な蔵書だ。

今回の40周年誌もその後の時代を網羅し、40年の活動を総括すべく、A4版180ページ近くの中に、貴重な言の葉が埋め尽くされている。冒頭を愛知県在住の芥川賞作家、諏訪哲史氏が特別に寄稿した詩が飾り、天野天街氏の手書きイラスト、恥ずかしながら小生のエッセイが続く。坂手洋二氏、平田オリザ氏、松田正隆氏、高田恵篤氏ら全国で活躍する表現者、馬場駿吉氏、小堀純氏、鬼頭直基氏らスタジオを支えたプレーン達の寄稿文が続く。祝いの言葉あり、オマージュあり、知られざるエピソードの披露あり、書き手のスタンスは様々だが、いずれもただの祝辞にとどまらない、時代や舞台空間への考察を踏まえた文章であり、俯瞰をすれば、ある意味<40年を踏まえた今>の定点観測にもなっている。



大仕事を終え穏やかに語る二村氏



完成した40周年記念誌「空間の祝杯Ⅱ」

## 多角的に語られる劇場論、演劇論、文化論

また「ネットワークを求めて」と題して、仙台、京都、長久手の各劇場からのメッセージも掲載。公共の立場である愛知県、名古屋市の文化事業団もこれに続く。実際に連携した活動の記録だけでなく、普通なら観客を奪い合い、ライバルな存在である劇場や事業団も含め、名古屋の小劇場文化を真摯に見つめようとする姿勢の現れであり、同時に七ツ寺(=二村氏)の懐の広さだろう。

さらには25周年以降も共同スタジオを利用し続けているいわゆる「お馴染みさん劇団」を紹介するコーナーがあり、ココも多くは主宰や代表以外がその集団を語るというスタイル。決して宣伝や「良いことばかり」ではない、行間の中に確かな批判性を孕んだ文章が続く。そして「特別寄稿」。安住恭子氏、海上宏美氏、森下貴史氏、大島寛之氏、平野勇治氏、高橋綾子氏、港大尋氏ら世代もジャンルも超えた評論家、表現者、制作者らが独自の持論を所狭しと書いている。いずれも読み応えのある文章で、祝40周年色の希薄さがなんとも心地よい。

それに続く「活動報告」のコーナーでは、節目ごとに行われてきた周年企画や七ツ寺プロデュース公演が貴重な写真とともに紹介され、他には、スタジオが独自で行ってきた人材育成事業、2010、2013年のあいちトリエンナーレとの連携事業、世界劇場会議と共催のアーツプログラム実践講座、韓国芸能の紹介などの記載に多くの頁が割かれている。さらに今回は、1994年から今春の一時休刊まで、長きに渡って継続されたいわゆる「七ツ寺通信」の総括的記述も掲載された。小屋の活動と併走して営まれた批判精神の象徴として、編集会議の裏話も含め、二村さん自身が、手短だが興味深く書いている。劇評、コラムの再

録に加え、記事一覧も添付され、これだけでもユニークな共同スタジオの活動を示す貴重な資料と言えるだろう。

## 民間の域を超えた年表の採録ぶり

そしてもう一つの圧巻が莫大なデータを採録された「表現活動の関連年表」だ。1998年から2013年の16年間に行われた活動を、①共同スタジオで行われた全演目、②それ以外の注目すべき演劇活動（東京、大阪を含む）、③ダンス・パフォーマンスを含む他ジャンルのアート活動、の3部門に分け、月ごとに併記していくスタイル。1頁をその年の上半期、下半期に分けたボリュームだ。さらに欄外には、公演の詳細や劇評、その年の受賞、著作、訃報などが柔軟に、スペースの許す限り書き込まれ、まさに「読む年表」としての編集方針が貫かれている。とても民間の一劇場がなすべき仕事ではないクオリティーであり、二村さんを助けデータを取りまとめた篠田竜太氏の仕事ぶり（彼の巻末エッセイも読み応えあり）にも頭が下がる。そして「墓碑銘」と称して25周年時にはご存命だった関係者が紹介され、二村むつ子氏、マルセ太郎氏、久保則男氏、今井良寛氏、水野鉄男氏らの功績を偲ぶ。もちろん二村氏のごあいさつで始まり編集後記で終

わるのだが、現代表の吉戸俊祐氏が舞台図面や備品の基本資料に加え、「会場提供のポリシー」や「設備改造の記録」などを添えているのも彼らしくて面白い。



七ツ寺共同スタジオの素舞台(掲載写真より)

## 紙へのこだわりと批判精神の継続

以上、簡単に内容を紹介するはずが、ずいぶんな文章量になってしまった。それこそ多層構造で充実した編集内容の証なのだが、やっと二村さんの登場だ。「インターネットで簡単にいろいろ調べられる時代にあって、わずかに15年の間にこの手のヴォリュームの記念誌を2つも出版するのって、正直ウチぐらいでしょうね」と穏やかに話す。「まあでも、この発刊に関しても、ポリシーの柱は共同スタジオが行ってきた取り組みの延長線上にあるわけです。一つには途切れながらも長く継続してきた「七ツ寺通信」の編集・発行。もう一つが当時はシンポジウムと呼んでた上演後に客を残して行う批評会。前者は小屋で上演してくれた作品を、良くも悪くもちゃんと振り返り批評する精神であり、後者は今で言うアフタートークのハシリ的な存在で、海上氏が始めた行為。もちろん今の客寄せやイベント的なものとは本質的に違うけどね」と二村氏。確かにこれらの基本姿勢があって、始めて2つの記念誌が持つ公平性や、小屋の活動を越えた広い文化芸術への同時代史としての側面は成り立っている。誰かが急に思い立って出来るレベルではなく、その批判精神の中でこの小屋に関わってきた人たちが声を放ち、その集大成として記念誌が構成され

ているわけだ。「小屋の運営から解放された今後は、劇場近くの居住地に移転した演劇・映画専門の古本屋『猫飛横丁』を細々と経営しながら、美術展のようなプロデュースもそのうち仕掛けてみたい」と語る二村さんだが、その表情はあくまで穏やかで、この40周年誌を世に出せた達成感に満ちている。筆者としては「お疲れ様でした」の言葉と同時に、いやいや、まだまだ若い表現者にとって刺激的な存在でい続けて欲しいと願っている。いや、きっとそうなるだろう。なにせ二村さんのことだから。



共同スタジオ外観と二村氏(掲載写真より)

## 「権威を持たない」小屋主の一線

40年を振り返っている雑談の中でこんな話題も出た。「長い歴史の中では、例えば『七ツ寺賞』なんかを創立して表現者の励みに、なんて話も出ました。でも僕は反対した。それだけはやりたくなかった」と二村氏。「僕自身にも批評の物差しみたいなものがある。でもそれは『それ以上』のものではないし『それ以上』になりたくはない」。なんて明確な権威の否定だろう。小屋主として、プロデューサーとしての一線を見据え、それを越えない姿勢こそが、公平な批評を継続していく精神なのだ。これが二村さんなりの誠意であり、この距離感がまさに40年間芝居小屋を継続させた原動力なのかもしれない。「僕にも常に目が離せず見続けてる劇団がある。でもそれはあくまで僕自身の何かしらの共感から生まれてると思いたい。そういうコトで収めたいんだよね」と二村さん。

## まさに「身銭を切って」の一冊の重み

さて最後に、こういう場の文章としては不適切かも知れないが、あえて書きたいのは、ぜひこの世にも稀な記念誌を購入いただきたい、ってコトである。25周年誌もよければ在庫のあるうちに併せて。何処かからのまとまった寄付や公的助成に頼ることなく、二村さんの身銭と熱意、執筆者の懇意だけで完成したこの本だからこそ、この本の重さを手にしてほしい。その重さに見合うだけの我々が忘れてはならない記録と軌跡、数々の貴重な舞台写真や珠玉の言葉が、そこにはあるはずだから。

# この人と...



童話作家・詩人

## ふじ まち こ 藤真知子さん

### —童話は未来へのおくりもの—

元気な魔女の子ども「まじょ子」が活躍するシリーズや、美人だけどちょっとドジな魔女のママが登場する「わたしのママは魔女」シリーズで、子ども読者から絶大な支持を得ている藤真知子さん。あっと驚く展開や軽快な文体、憧れのアイテムが満載された作品世界は国境を越えて読者を魅了し、アジアを中心にいくつかの言語にも翻訳されている。行動的な登場人物を次々に生み出すバイタリティの秘密を知りたいと思い、取材に伺った。  
(聞き手:酒井晶代)

### 想像力の源泉・祖母の愛

藤さんは東京都文京区生まれ。同居していた父方のおばあさまから大いに可愛がられて育つ。旧旗本の出身で才色兼備の祖母は、幼少時の藤さんにとって憧れの人であったという。立ち居振る舞いもしっかり仕込まれて、正座が苦にならない子どもだった。幼稚園時代までは身体が弱く、父方の叔母が大学在学中に病死したこともあって過保護に育



幼少期、祖母とともに

てられた。病気がちで決して行動的な子どもではなかったというが、心は遠い世界へと自在に空想を広げていたようだ。

そのひとつが外国に対する強い憧れ。藤さんが小学校1年生の時、法曹界で活躍していた父親は1年間の欧米研修へ。祖父も戦前に洋行経験があり、自宅には各地で撮った写真が残っていたりもした。写真や手紙などを手がかりに、異国に対する憧れを一心に募らせる少女の姿が目につく。もうひとつは人知を超えた不思議な世界への親近感。妖精や妖怪の存在をごく自然に受け入れ、幼稚園の裏庭にそびえる大木に妖怪がいると信じて疑わない子どもであった。豊かな想像力もおそらくおばあさま譲りだったのだろう。美しさに魅せられて庭のアオキの実を採ってしまった時には、「木の精が泣いている



幼稚園時代、自宅にて

から返しなさい」という叱られ方をされたようだ。「祖母は私が小学校一年生の時に亡くなりましたが、その後も周囲の人々よりずっと身近に感じられたものです」との言葉からも、祖母と孫との深いつながりが偲ばれる。

## 華やかな世界への憧れ

美しいものや華やかなものへの関心は、10代に入ると映画や舞台の世界へと対象を広げていく。中学生になると夢中になったのがディズニー映画のスターであったショーン・スカリーで、来日時には友人と一緒にサイン会やファンの集いにも熱心に通った。ある日、同級生の男の子にその魅力を問われ、「全部が好き」と答えては説得力に欠けると思い懸命に考えるも、スカリーその人ではなく、演じている役の魅力しか思い浮かばずに熱がさめたというエピソードからは、ファンタジーの世界に心を遊ばせながら現実の世界もしっかり見つめていた聡明な少女の姿が思い浮かぶ。

小学生の頃の本は家庭教師の先生が選書して購入してくれたものの、堅いものが大半であまり関心が持てなかったというが、ホメロスやシェイクスピアなどの古典は好きだった。また少女漫画も愛読。中学生になる頃には作文と朗読が得意な少女に成長していく。幼稚園から高校までをお茶の水女子大学附属で学んだ後、東京女子大学では英米文学を専攻し、小学校時代から学んでいた英語に磨きかけた。入学当初は進路としてアナウンサーや旅行ガイドを考えていたというが、在学中に国際交流のサークルで出会った男性と卒業後すぐ結婚し、夫の赴任地である名古屋へ。ここから東京生まれ東京育ちの藤さんの名古屋暮らしがスタートする。

## 童話講座へ

童話創作は講座で学んだ。学生時代に師事していた華道の先生が結婚後に仕事を始めて活躍しておられたこと、夫の仕事の関係でアメリカ暮らしを体験するなかで女性も仕事をするのが当然という風潮に接したことなどが刺激となり、何か始めたいと考えた藤さんは、2人のまだ小さかったお子さんを育てながら果敢に行動を開始する。着手したのは、英語を教えること、司法関係の資格を取得すること、童話を書くことの3つ。司法の道は父親の職業に対するプレッシャーもあり断念、英語教室も子育てとの両立が難しく、



アメリカ滞在時代

最後まで続いたのが童話創作だったのだそう。次に渡米するまでの3年間取り組んでダメならやめればよいという気持ちで、手始めに名古屋市婦人会館（現・女性会館）の創作童話講座を受講したのは1983年であった。

そういえば童話を書き始める前にこんなこともありました、と話してくださったお話がある。それはある朝、洗濯物を干していたときのこと。「お寝坊な雫がまだ目覚めないから、洗濯物がぬれているのね」と即興で空想を口にしたところ、夫から「それいいね、童話書いたら？ 母が子に聞かせるような話を」との勧めが。当時の藤さんにとって童話のイメージは中学生の時に読んだ「メアリー・ポピンズ」（トラヴァース作）だったため、夫がイメージしたであろう“暖かでほのぼのとした童話の世界”がピンとこなかったというが、子ども時代に培った想像力が結婚後も会話の随所に顔をのぞかせていた様子をうかがうことができる。

創作童話講座では原稿用紙70枚ほどの作品「海底の帝国」を書き上げた。ムー大陸の伝説を題材とする物語で、謎めいた冒頭部から結末のどんでん返しまで一気に読ませる。核戦争を取り上げたシリアスな作品でもあるが、ムー人と人間の間に生まれた子どもという主人公の設定など、のちの人気シリーズにつながるアイデアが早くも登場しており注目される。



イギリス滞在時代

## 魔女が活躍するふたつのシリーズ

続いてカルチャーセンターの童話教室にも参加。公募への応募と入賞を経て、単行本でのデビューを飾った作品が1985年の『まじょ子どんな子ふしぎな子』（ポプラ社）である。おてんばでいたずら好きな魔女の「まじょ子」が、交番やデパート、病院、帽子屋を訪れ、出会った大人たちを魔法の世界へ誘う短編連作集で、小学校低学年向けの楽しく読める児童文学として支持され現在までに55巻を刊行する人気シリーズとなっている。3年後には中学年向けの「わたしのママは魔女」シリーズもスタート。こちらはパイロットのパパと魔女のママをもつ女の子カオリが主人公で、好評のうちに50巻で昨年完結した。海外テレビドラマ「奥さまは魔女」や、漫画「魔法使いサリー」をはじめとする魔法少女ものように他ジャンルでの先行例はあるものの、『まじょ子どんな子ふしぎな子』の巻末で童話作家の小沢正氏が指摘しているように、当時の児童文学の世界では魔女イコール昔話の悪役というイメージが強く、明るく元気な子どもの魔女というキャラクター設定は斬新であった。ちなみに角野栄子『魔女の宅急便』も同じく85年にシリーズ第1巻が刊行されており、子どもの本の世界で魔女のイメージが転換期にあったことを思わせる。

魔女という異世界の住人が活躍する物語でありながら、藤さんにとって作品は「日記みたいなもの」なのだという。シリーズ当初は自身の子どもの時代の体験やわが子とのやりとりがごく自然に作中に織り込まれていったし、近年では若い編集者やイラストレーターとの会話のなかからアイデアを得ることも多いそうだ。「ちゃらんぼらんで楽天的なまじょ子は、私に似ているところがあります」「子どもはだれでも『秘密』を持っています。カオリの秘密はママが魔女であること



『さようなら、まほうの国!!』  
〔わたしのママは魔女〕最終巻、2013年  
藤 真知子/作 ゆーちみえこ/絵 ポプラ社



『まじょ子と黒ネコのケーキ屋さん』  
〔まじょ子〕155巻、2014年  
藤 真知子/作 ゆーちみえこ/絵 ポプラ社

ですが、悩みの種類は異なっても『秘密』を所有しているという点で、子どもたちが共感してくれるのではないのでしょうか」——子ども読者はシビアな存在で、権威は通用しない面白くなければ読まない。藤さんのこうした言葉のなかに、長年子どもたちに支持されてきた魅力の秘密がありそうだ。



イベント「まじょ子先生の魔法教室」



イベント「まじょ子先生とまほうで遊ぼう」

## 詩作や同人誌発行など、多彩な活躍

「まじょ子」「わたしのママは魔女」以外にも「じどうしゃカーくん」や「ちびまじょチャミー」など多くのシリーズものを手がけてきた藤さんは、一方で「青空の階段」や「チェンジ」など詩人の横顔もお持ちである。「風がふく／すると／わたしの まわりの／着古した／空気が／するりと／ぬげる／あたらしい 空気に／きがえる／その／しゅんかんが好き」とうたう「チェンジ」は多くのアンソロジーに収録され、子どもたちに親しまれてきた。また、1990年には童話教室で学んだ仲間とともに同人誌『ユニコーン』を創刊（2005年から『カサブランカ』に改題）。現在も童話のほかエッセイや写真、詩を収録した同人誌の発行を続けている。

藤さんは多彩な趣味人の顔も持つ。学生時代から先述の華道のほか茶道や料理、フルーツを習い、執筆活動に入ってから中国語や香道、手品などを身に着けた。なかでも一時期熱中したのが日本舞踊で、中日劇場や今池ガスホール、厚生年金会館など舞台にも数多く立っておられる。



日本舞踊 花柳流「屋敷娘」を舞う藤さん

## 環境問題への関心と行動

2000年代に入り、藤さんは環境問題という新たなテー



コンサートで自著を朗読

マに着手する。きっかけは04年に愛知県温暖化防止センター（環境創造研究センター）の依頼で絵本『モットしゃちょうとモリバーバのもり』（ポプラ社、2005年刊）を執筆したこと。モリバーバという神を信仰し、森を大切にしながら暮らしてきた「ズートのくに」と、拝金主義に毒された「モットモットのくに」とを対比させながら豊かな自然環境がもたらす幸せを描いたこの作品は、中国、台湾、韓国などで翻訳刊行され、台湾では〈小緑芽奨〉を受賞した。

さらに2009年には藤さん自らが脚本を書きこの絵本を舞台化、豊田シティバレエ団による初演（於三好町=現みよし市文化センター・サンアート）を皮切りに各地で公演。国内のみならず11年にはロシアのエルミターージュ劇場でも上演されて反響をよんだ。同年3月11日付の中日新聞は「ロシアでは木材輸出のため森林の乱伐が進み、大きな山火事に見舞われている。多くの人に見て感じてほしい作品」という現地の観客の声を紹介しながら、その盛況ぶりを報じている。少女時代から華やかな映画や舞台が大好きだった藤さんご自身にとっても、著作とバレエのコラボレーションはお仕事のひとつの理想形ではないだろうか。このほかにも『まじょ子とドキドキの森』（単行本2003年刊）がバレエに、『まじょ子とラブラブメロディの国』（単行本2004年刊）が音楽劇にと近年は作品の舞台化が続いている。

環境問題に対する熱意は取材の折にもお言葉の端々に



「まじょ子とドキドキの森」バレエ公演

感じられた。活動も文字どおり現在進行形で、舞台やコンサート活動の収益を自然保護活動に生かしているほか、2006年には森林環境協働ネットワーク「森の協働ネット」を設立、続いて08年には環境意識の啓発教育を目的とした「おおもりこもりてんこ森祭実行委員会」を創立して会長に就任。後者では県内の図書館などを会場に朗読劇や読み聞かせ、クイズや工作教室など楽しみながら環境問題を学ぶイベントを開催したり、10年からは「森の童話読書感想はがきコンクール」を実施したりしている。創作と社会貢献とが有機的に結びついて、さまざまな花を咲かせていると言えよう。



「森の童話読書感想はがきコンクール」表彰式

## 未来の子どもたちへ

取材の最後に、今後の執筆活動について展望や構想を伺った。

「童話は、子どもたちに生きていることの素晴らしさを伝える文芸だと考えています。これからも『普通の子』の悩みや苦しみを表現していきたいし、子どもたちが生きる力を得られるような作品を書いていきたいと思っています」と力強く語ってくださった。優しさや思いやりももちろん大切だけれど、子どもたちには賢くなってほしい。日本ではとかく読書の楽しさが強調されがちだが、本を通して知識を得ることを大事にしたい。大人が一方向的に教えるのではなく、子ども自らが知る権利を重んじながら作品を書いていきたいとのこと。

病弱だった少女はエネルギーな大人へと成長し、子どもたちの人気者になった。「子どもは未来形の存在。子どもに期待することは未来を信じ、将来に希望を託すこと」という言葉に接して、童話作家・藤さんのエネルギーの源は何より子ども=未来への揺るぎない信頼にあるのだとの思いを強くしたのだった。

# ピックアップ

## クラリネット奏者 つつみあつき 地元アーティストとの新作発表をプロデュース 幅広い表現の開拓を継続

クラリネット奏者のつつみあつき氏は昭和33年生まれ、名古屋市千種区出身のベテラン。その活動は名古屋を中心にして独創的な展開である。なかでも地元の作曲家や演劇、舞蹈家とのコラボレーションでは注目すべき成果を上げている。昨年度受賞した「名古屋市芸術奨励賞」では、『平成17年からは、演奏家と作曲家の共同制作



快奇冒険ミュージカル  
少年探偵長のチラシ

グループ「MiA」を結成し、音楽と文学、美術とを融合した作品に取り組むほか、俳優、作曲家とのコラボレーションによる総合舞台芸術作品も手掛けている。音楽劇、ミュージカル、バレエを取り入れた独創的な公演に取り組むなど、その活動は多岐に渡っている』と評価された。クラシックの演奏家が

新しい作品を創造する、その活動の一端を紹介する。

この8月27、28日に名古屋市東文化小劇場で開催された「快奇冒険ミュージカル 少年探偵長」はつつみ氏のこれまでの活動の集大成といえる。杜川リントロウ氏の構成・演出・出演、小塚憲二氏の作曲、そして、つつみあつき氏が主宰する「モック木管五重奏団」によるlive演奏である。また、つつみ・小塚・杜川の3者による新

作作品として「音楽劇 おとなしいきょうりゅうとうるさいちょう」(2006～)、「音楽劇 一人で演じる走れメロス」(2009～)、



つつみあつき氏の演奏

「ミュージカル 三人で三銃士」(2010～)などがあり、年間を通して現在まで、名古屋を中心とした小学校、幼稚園、保育園、各地の公民館などで再演を重ねている。これらはつつみあつき氏の生演奏が中心となる。

前出の1989年に結成された「モック木管五重奏団」

は、フルート/平野明美、オーボエ/羽佐田優子、クラリネット/つつみあつき、ホルン/吉田章、ファゴット/田中由美のメンバーで、音楽物語「三びきのやぎのガラガラドン」(1998～)、「笛を吹いた竜」(2001～)、「幸福の王子」(2006～)などの舞台作品(渡邊康作曲)をこちらも継続して各所で公開演奏している。名古屋市内のある幼稚園では、11年連続で「ガラガラドン」を公演して好評を得ている。これらの作品のいずれもがつつみ氏がプロデューサーとして、企画の中心となっている。

1994年につつみ氏とソプラノ/谷上節子、ピアノ/北住淳で、「三人のコンサート」として結成されたMiAは、今年の6月21日と7月6日に5/R Hall&GalleryにてMiA We Love NAGOYA〈戦後70年の平和を讃えて〉と題したコンサートを開催した。水野みか子作曲「なごや交通組曲」、平田聖子作曲「なごや恋の三社参り」、国分隼人作曲「ハイライト名古屋」など、名古屋を題材にした作品を中心にしたプログラムが組まれた。地元名古屋にフォーカスした多くの作品を生んだこの企画は来年の8月4日、熱田文化小劇場での公演も決定した。名古屋を軸にしたつつみ氏の新たな活動が地元の文化を元気づけている。(W)



MiA We Love NAGOYA のチラシ

# いとしの サブカル

## 氷の世界から ナゴヤCMワールドへ

金城学院大学国際情報学部 教授

**庫元 正博** (くらもと まさひろ)

広告会社でクリエイティブ・ディレクターとして広告、販促キャンペーンの企画・制作から、商品企画、デザインや企業のブランディング、VI作業などに携わる。大学では広告、消費者心理、広告クリエイティブなどを教える。

今の職に就くまで、長年コマーシャル作りに携わってきた。撮影現場ではいろんな専門家と出会った。変わった職種でいえば料理やお風呂などのシーンに欠かせないさまざまな湯気を作る湯気屋さんや氷専門のクッキング・スタイリストさんだ。

氷のスタイリストさんとは洋酒メーカーの撮影の時に会ったのだが、藤竜也さん似の渋いミドルで、ウイスキーに入れる氷をスタジオの片隅のテーブルで何時間も黙々と包丁で削りだしていた。円球状の氷からきれいな角があるロック氷まで、まるで寒天かゼリーのように氷をスパッパッと切っていくので、まだ若かった私はどうしてそんなに簡単に切れるのか聞いてみた。すると「氷にも目があるのでその目に沿って切っていくときれいに切れるんですよ」とにこやかに、でも包丁の手を休めず答えてくれた。氷の撮影が世の中にどれほどあるのか知らないが、CMのプロデューサーに後で聞いたところ「彼はそれを仕事にしていますよ」ということだった。CM映像の世界もなかなかサブカルチャー的な深みをもっているということだろうか。



CMもまた世の中の的に言えば、サブカルチャーの領域にある業界だろう。特に全国でオンエアをするナショナルスポンサーのCMと違って、地方スポンサーのCMにその地方独自のカルチャーを感じる人が多い。おしゃれで気取った東京発のCMに対して、大阪弁による庶民的で下世話な関西CMはその典型だが、名古屋発のCMもまた独自の世界観を出したものが多い。

一時期誰もが覚えていた「イカナイカン」と連呼していたカメラの安売り店の一連の面白CMや、押しの強そうな社長がカメラ目線で「名古屋・清水口の〇〇〇へどうぞ」と語っていた宝石店のCMなど、まさに名古屋色の強いCMといえた。そんな中でも名古屋CMの至宝といえば、昭和44年ごろ放送され東海圏はおろか全国的なヒットCMになった名古屋の食品会社のレトルトカレーのCMだろう。名古屋出身の南利明さんが「めっちゃめっちゃうみゃーでいかんわ。たった3分、温(ぬく) ためるだけ〜」と当時珍しかった名古屋弁でテンポよく語るこのCMは、関西に住んでいた小学生の私でさえ強烈に覚えている。だがこのCMが生み出した最大の流行語はCMの最後に出てくる「ハヤシもあるですよ〜」という言葉だった。

名古屋弁の一つに『お値打ち』というコトバがある。ただ安いだけでなくいいものが入るといい値段で手に入るという意味だが、このCMもメイン商品にさらにもう一つ商品を広告するという、名古屋のお値打ち文化、カルチャーを表したものになっているといえるだろう。

今このCMを見返してみると、カレーが出てくるシーンに盛大に湯気が立っている。きっとこのCMでも湯気屋さんが精魂こめて湯気を作りだしたのだと思うとCMがますますいとおしいものを感じられる。

人形浄瑠璃

# 文楽

人形浄瑠璃「文楽」は、日本を代表する伝統芸能の一つで、太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術です。太夫の語り、三味線の音、3人遣いの人形で複雑なドラマを表現します。

解説では、文楽のあらすじを出演者がわかりやすくお話しし、みどころをお伝えします。

今回の公演も、電光表示パネルを舞台下手脇花道に設置し、初めて鑑賞する方でもお楽しみいただけるように字幕を表示します。



開催日時 10月15日(水) 昼の部：午後2時00分～午後4時50分頃  
夜の部：午後6時30分～午後9時00分頃  
10月16日(木) 昼の部：午後2時00分～午後4時30分頃  
夜の部：午後6時30分～午後9時20分頃

会場 名古屋芸術創造センター  
会演目 10/15 昼の部・10/16 夜の部

「解説」  
そねぎしんじゆう いくたましやせん てんまや てんじんのもり  
「曾根崎心中」 生玉社前の段、天満屋の段、天神森の段  
よしつねせんぼんざくら みちゆきはつねのたび  
「義経千本桜」 道行初音流

10/15 夜の部・10/16 昼の部

「解説」  
すがわらでんじゆてならいかのみ てらい てらこや  
「菅原伝授手習鑑」 寺入りの段、寺子屋の段  
つりおんな  
「釣女」

入場料 <全指定席>各部とも ※未就学児入場不可

【一般】 一階席4,700円 二階席2,600円  
【名古屋文化振興事業団友の会会員】 一階席4,200円 二階席2,300円



「曾根崎心中」天神森の段

チケット取扱い

名古屋文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387

(平日9:00～17:00/チケット郵送可) ※名古屋文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。

チケットぴあ TEL 0570-02-9999 Pコード 437-376 サークル・サンクス、セブン・イレブン

主催 公益財団法人 名古屋文化振興事業団

写真 青木信二

一味違う印刷をお探しのあなた！  
箔印刷は押してましたが、今は

## 箔がっつくんです!!

(コールドフォイル印刷)

### 鬼頭印刷株式会社

Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171  
data@kito-net.com www.kito-net.com  
〒456-0073 名古屋市熱田区千代田町3-22

- コールドフォイル印刷
- フォログラム転写印刷
- UVオフセット印刷
- バリアブル(可変データ)印刷
- オフセット印刷
- Mac、Win、DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

### 舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。  
ハイビジョンで撮影し  
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム  
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

## ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。  
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

**MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ**

〒464-0850 愛知県名古屋千種区今池1-14-11 CASA LUZ302  
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

*We make you move*

舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作  
**株式会社エーアンドブイ**  
〒464-0846 愛知県名古屋千種区城木町二丁目98  
TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909